

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

マルホ皮膚科セミナー

2016年10月20日放送

「第115回日本皮膚科学会総会 ①

総会を終えて」

東京慈恵会医科大学 皮膚科
教授 中川 秀己

はじめに

平成28年6月3日(金)～5日(日)までの三日間、京都の国立京都国際会館において第115回日本皮膚科学会総会を主催させていただきました。会期中6,000名を超える参加者が全国からお集まりいただき、活発な討論がなされ、無事盛会裡に総会を終了することができました。東京慈恵会医科大学皮膚科学講座が総会を担当させていただくのは、1969年第68回第5代土肥淳一郎教授、1999年第98回第7代新村真人教授に次いで第8代目の教授の私で3回目になります。本年は、東京慈恵会医科大学皮膚科学講座が1896年(明治29年)に笹川三男三先生を初代皮膚科教授として開設されてから120周年に当たっており、教室員一同精一杯頑張ったつもりです。参加いただいた皆様方に教室を代表して深謝いたします。また学会運営を円滑に進めるに当たってご尽力いただいた日本皮膚科学会の総会担当の山田さん、山本さん、石地事務局長、朝比奈プ

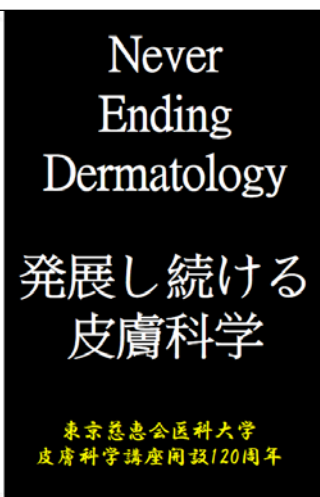
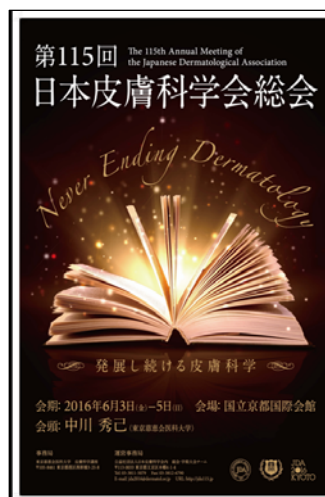
東京慈恵会医科大学皮膚科学 講座沿革

1896(明治29)年:東京慈恵医院医学校に皮膚科学講座開設
(初代笹川三男三教授)(明治23年東京大学で皮膚病学梅毒科が開設)
1922(大正11)年:二代朝倉文三教授就任
1930(昭和5)年6月:朝倉教授病歿で辞任し、三代渡辺一郎教授就任
1933(昭和8)年:四代土肥幸司教授就任
1943(昭和18)年:土肥教授が退職し、土肥淳一郎助教授が講義・診療を行う
1946(昭和21)年:復員後、五代土肥淳一郎教授就任
1972(昭和47)年:六代笹川正二教授就任(専門:アトピー性皮膚炎、接触皮膚炎)
1984(昭和59)年:七代新村真人教授就任(専門:レックリングハウゼン病、皮膚ウィルス感染症)
1996(平成8)年:皮膚科学教室同講100周年記念祝賀会(東京プリンスホテル)
新村教授は平成15年に退任、その後、1年1か月は栗原学長(現理事長)が皮膚科講座を兼務
2004(平成16)年5月:中川 秀己教授就任(八代目)

プログラム委員長、梅澤実行委員長、石氏医局長をはじめとする東京慈恵会医科大学皮膚科学教室員と同窓会である慈身会の会長、澤田俊一先生をはじめとする同窓会の先生方に厚く御礼を申し上げます。

「Never Ending Dermatology—発展し続ける皮膚科学—」と「地霊人傑」

本総会のテーマは「Never Ending Dermatology—発展し続ける皮膚科学—」としました。種々の皮膚疾患の病態の解明が進むとともに、この数年、分子標的薬を含む多数の新薬が皮膚疾患の治療に応用されるとともに、更に新薬の開発が矢継ぎ早に進められています。国内に目を向けると医療保険環境の急激な変化、超高齢化社会が進むとともに、地域医療の充実が叫ばれています。また、先行き不透明な新専門医制度の発足、卒業時ア



ウトカムをベースとした国際医学教育基準に適合する医学カリキュラムの改革などを考えると、それらに対応して皮膚科学も発展し続けなければいけません。このテーマと会頭講演のサブタイトル「地霊人傑：ちれいじんけつ」とを合わせて学会内容に反映できるよう最大限の努力をしたつもりです。なお、「地霊人傑」は東京慈恵会医科大学の学祖、高木兼寛先生の「病気を診ずして病人を診よ」とともに座右の銘の一つであります。「医療環境の急激な変化、グローバル化に迅速に対応するために皮膚科学はたゆまなく発展し続けなければいけません」「『地霊』から、沢山のことを学び、活用し、それを伝統の叡智として次の世代に伝えていくためには、我々自身が真摯な気持ちで皮膚科に取り組む地霊となり、人傑を育成することが大切ではないかと思います。明日を生きる知恵は歴史の中にあると考えています」と会頭講演で述べさせていただきました。

招待講演・特別企画

招待講演と特別企画などについてですが、56回目の土肥記念国際交換講座の演者には英国の King's College London 皮膚科教授の Barker 先生に「OPTIMISING OUTCOMES IN PSORIASIS」のタイトルで乾癬の病態と新しい治療の展望と将来の夢をお話ししていただきました。King's College London の前身である St. Thomas 病院医学校は学祖の高木兼寛先生が学んだ医学校であり、長年医学生の交換留学を行っている長い連携のある医学校です。また Barker 先生は私のライフワークである乾癬の研究分野を通して長い親交のある先生です。

特別企画は疥癬の治療薬イベルメクチンを発見された皮膚科にもなじみの深い先生で

ノーベル賞を受賞された大村智先生による「微生物から人類への贈物ーエバーメクチン物語ー」が大変好評でほぼ満席の状態でした。その他「再生医学」、「より強い皮膚科を目指すキャリアパス」、教室が精力的に関わってきた「神経線維腫症Ⅰ型」、「痛みとかゆみを解き明かす」、京都の有名な有馬住職様による「別に工夫なし」、「目からウロコの基礎医学」「高齢化時代の地域医療を考える」、新専門医制度では必修となる「知っておくべき医療安全・感染症対策・COI」を取り上げました。お蔭さまでどの企画も好評でした。

なお、今回の皆見省吾記念賞は慶応義塾大学の足立先生、日本皮膚科学会雑誌論文賞は昭和大学の今泉先生、The Journal of Dermatology Best Paper Prize は今村病院分院の米倉先生が受賞されました。

教育講演・一般演題

教育講演、一般演題などですが、教育講演は51セッションで、オーガナイザーの先生方に（1）ジュニアコース（2）シニアコースと難易度を付けてもらいましたが、聴講を選択するのに役立って良かったとお褒めのお声を多数いただきました。

一般演題は、これまでの総会では原則としてポスター展示となっていましたが、これを大幅に見直し、海外の学会に倣って電子化（e-Poster）にすることにしました。また、支部総会や地方会のように口頭での発表の機会を増やすことにしました。一般演題（451題）のうち158演題を座長の先生、プログラム委員の先生に選定していただき、優れたものを口頭発表にしましたが、これも好評で、次回からの総会でも継続される予定になっています。医学生・研修医発表セッション（Future Dermatological Session）には全国53大学から医学生・研修医92名が参加し、教育講演とともに各施設から演題が発表され活発な討議が行われました。来年より各教室の出局者が増えるきっかけになることを期待しています。また新しい試みとして主にアジアの若手の皮膚科医を中心としたEnglish Speaking Sessionも企画しました。これは来年も継続される予定になっています。スポンサードセミナーは計63企画されましたが、どのセミナーも参加者であふれており、ホッとしている次第です。

最終日には恒例のスペシャリティーナースセミナーを行いました。今年も300名以上の参加者があり、年々皮膚科診療に情熱を燃やす看護師さんが増えてきているようで頼もしく思いました。午後の市民公開講座「進歩する乾癬・悪性黒色腫の診療」では近年、治療の進歩が著しい両疾患を取り上げ、姉妹校である京都府立医科大学と共催で最新の情報を提供していただきました。京都府立医科大学の加藤則人教授、教室の延山嘉真先生の名司会のもと、市民だけでなく皮膚科医にも解りやすい公開講座であったと思います。

おわりに

今回は「良く学びよく遊べ」をモットーとした総会にしたいと考え、意見交換会は京都市水族館で行い、会員懇親会は沢山の方々が参加できるように国立京都国際会館を使用し、公益法人の許容範囲内ですが、お酒、料理を含め工夫を凝らしました。島田理事長が「愛の賛歌」を熱唱され盛り上がりとともに多数の方々が参加され、和気藹々と懇談してくれて主催した我々も一安心でした。毎年、総会は盛り上がりを見せており、来年、東北大学の相場教授が仙台で開催される総会を期待して話を終わりにさせていただきます。